

実践哲学ノート (10)

谷口 孝男

Notizen über die praktische Philosophie (10)

Takao TANIGUCHI*

Abstract

Diese Arbeit behandelt die praktische Philosophie Yoshiaki Utsunomiyas. Seine praktische Philosophie kann die von der Menschlichkeit (Humanität) heißen. Dabei zugleich will ich sein Denken selbst und auch seine Denkweise lernen.

第三章 「I-2 哲学者と知恵—カントのフィロソフィアについて—」

第二節 「第四の問いの意義」

【補論1】 [カントの主要著作の読解]

(α) 『道徳形而上学の基礎づけ』 [V]

[定言命法はいかにして可能であるか (Wie ist der kategorischer Imperativ möglich?)] (続)

(143)

「[定言命法は可能である] [①私は英知界の成員であると同時に感性界の成員である] こうして定言命法は次のようにして可能である。すなわち、自由の理念 [存在すべきものとしての自由] が私を英知界の成員たらしめるが、このことによって、もし私が英知界の成員でしかないとすると、私のすべての [道徳的] 行為は意志の自律につねに適合しているであろうが、しかし私は私を同時に感性界の成員と見るから、[私の (道徳的) 行為は意志の自律につねに] 適合すべきなのである。[②定言的な「べし (Sollen)」はアプリアリな総合的命題] この定言的な「べし (Sollen)」は一つのアプリアリな総合的命題 [感性的意志は理性的意志である] を示すが、それは感性的な欲求によって触発された私の意志に、さらに同一の意志の理念 [存在すべきものとしての意志] が、とは言え悟性界に属する [アプリアリで] 純粋な、それ自身として実践的な意志の理念 [存在すべきものとしての意志] が付け加わり、この [理性的] 意志が前者の [感性的] 意志を理性にそくして規定するための最上の条件を含む、ということによるのであって、この間

の事情は、感性界の直観に、それ自身としては法則的形式一般を意味するにすぎない悟性概念が付け加わり、それによって自然の全〔理論的〕認識が基づくアプリアリな総合的命題を可能にするのとはほぼ同じなのである。(Und so sind kategorische Imperativen möglich, dadurch daß die Idee der Freiheit mich zu einem Gliede einer intelligibelen Welt macht, wodurch, wenn ich solches allein wäre, alle meine Handlungen der Autonomie des Willens jederzeit gemäß sein würden, da ich mich aber zugleich als Glied der Sinnenwelt anschau, gemäß sein sollen, welches kategorische Sollen einen synthetischen Satz a priori vorstellt, dadurch daß über meinen durch sinnliche Begierden afficirten Willen noch die Idee ebendesselben, aber zur Verstandeswelt gehörigen reinen, für sich selbst praktischen Willens hinzukommt, welcher die oberste Bedingung des ersteren nach der Vernunft enthält; ungefähr so, wie zu den Anschauungen der Sinnenwelt Begriffe des Verstandes, die für sich selbst nichts als gesetzliche Form überhaupt bedeuten, hinzu kommen und dadurch synthetische Sätze a priori, auf welchen alle Erkenntnis einer Natur beruht, möglich machen.)」(同上, 197頁)

(144)

〔定言命法がいかにして可能であるかの証明(演繹)の正当性は常識によっても確証される〕
 〔①カントの人間愛「(39)を参照」〕通常の間人理性の実践的使用〔実践理性〕も、この演繹が正当であることを確証する。いかなる人間も、極悪な人間ですらも、ふだん〔実践〕理性を使用する習慣を身につけてさえいれば、意図の高潔さとか善い格率を堅く守ることとか同情とか万人への好意とかの(しかもそれらに利益とか安楽とかの大きな犠牲が結び付いた)実例を示されると、自分もそのように心がけたいと願わずにはいられない。〔②人格の内的価値への傾動〕かれはただ自らの傾向性と衝動のゆえに、それ〔上〕に示されたような心がけを自分のうちに実現できないのである。それでもかれは、その際同時に、かれ自身にとってすら煩わしいこうした傾向性から自由でありたいと願っている。それゆえ、かれはこのことによって、感性の衝動から自由である意志をそなえ、思想〔頭〕のうちで、感性の領域における欲求の秩序とはまったく異なった事物の秩序のうちへ自らを置き移していることを示すのである。なぜなら、かれがかの〔傾向性から自由でありたいという〕願いによって期待できるのは、欲求のいかなる満足でもなく、したがってかれのなんらかの現実的もしくは想到可能な傾向性を満足させる状態でもない(なぜなら、かれをこの願いへと誘った理念そのものが、このことによって自らの卓越性を損なうからである)のであって、期待できるのはただかれの人格(Person)のいっそう優れた内的〔絶対的〕価値だけだからである。〔③善い意志の自覚〕だがかれがこうしたより善き人格(Person)であることを確信するのは、かれが自らを悟性界の成員の立場に置き移すときであって、自由の理念〔存在すべきものとしての自由〕が、すなわち感性界の規定する原因に依存しないという理念〔そのように存在すべきものとしての〕が、否応無しにかれを強いてそうさせるのであるが、この〔悟性界の成員の〕立場においてかれは善い意志(ein guter Wille)を自覚するのであって、この善い意志は、感性界の成員であるかれの悪い意志にとっては、かれ自身が告白するように〔道徳〕法則〔すなわち定言命法〕をなすのであって、かれはそれに背きながらもその威信を認めるのである。〔④「べし(Sollen)」と「意欲する(Wollen)」〕それゆえ、道徳的な「べし」は、英知界の成員としての〔かれに〕固有で必然的な「意欲する」であって、かれが自らを同時に感性界の成員と見る限りにおいてのみ、それはかれにとって「べし」と考えられるのである〔(131)参照〕。(Der praktische Gebrauch der gemeinen Menschenvernunft bestätigt die Richtigkeit dieser

Deduction. Es ist niemand, selbst der ärgste Bösewicht, wenn er nur sonst Vernunft zu brauchen gewohnt ist, der nicht, wenn man ihm Beispiele der Redlichkeit in Absichten, der Standhaftigkeit in Befolgung guter Maximen, der Theilnehmung und des allgemeinen Wohlwollens (und noch dazu mit großen Aufopferungen von Vortheilen und Gemächlichkeit verbunden) vorlegt, nicht wünsche, daß er auch so gesinnt sein möchte. Er kann es aber nur wegen seiner Neigungen und Antriebe nicht wohl in sich zu Stande bringen, wobei er den noch zugleich wünscht, von solchen ihm selbst lästigen Neigungen frei zu sein. Er beweiset hiedurch also, daß er mit einem Willen, der von Antrieben der Sinnlichkeit frei ist, sich in Gedanken in eine ganz andere Ordnung der Dinge versetze, als die seiner Begierden im Felde der Sinnlichkeit, weil er von jenem Wunsche keine Vergnügung der Begierden, mithin keinen für irgend eine seiner wirklichen oder sonst irdenklichen Neigungen befriedigenden Zustand (denn dadurch würde selbst die Idee, welche ihm den Wunsch ablockt, ihre Vorzüglichkeit einbüßen), sondern nur einen größeren inneren Werth seiner Person erwarten kann. Diese bessere Person glaubt er aber zu sein, wenn er sich in den Standpunkt eines Gliedes der Verstandeswelt versetzt, dazu die Idee der Freiheit, d. i. Unabhängigkeit von bestimmenden Ursachen der Sinnenwelt, ihn unwillkürlich nöthigt, und in welchem er sich eines guten Willens bewußt ist, der für seinen bösen Willen als Gliedes der Sinnenwelt nach seinem eigenen Geständnisse das Gesetz ausmacht, dessen Ansehen er kennt, indem er es übertritt. Das moralische Sollen ist also eigenes nothwendiges Wollen als Gliedes einer intelligibelen Welt und wird nur so fern von ihm als Sollen gedacht, als er sich zugleich wie ein Glied der Sinnenwelt betrachtet.)」(同上, 198~199頁)

[あらゆる実践哲学の究極の限界について (Von der äußersten Grenze aller praktischen Philosophie.)]

(145)

「[自由の概念と経験概念] [①意志の自由] 人間はすべて自らが意志にかんして自由であると考へている。[道徳的] 行為そのものについて、それが生起しなかつたにもかかわらず生起すべきであつたとするすべての判断は、このこと [意志の自由] に由来する [自然の諸現象が自然法則によつて決定されているの] にたいして、道徳の諸行為は主体の「意志の自由」すなわち「自律」によつて選択される。主体は、ある行為を、生起させることも、また生起させないことも、選択できたのである。そこで、生起させるべきであつたものを、実際には生起させなかつたという事態が生立可能となる。」 [②意志の自由は経験概念ではありえない] とは言へ、この自由はなんら経験概念ではなく、また経験概念であることもできない。なぜなら、自由の概念は、たとへ経験が、この自由の前提の下で必然的と考えられる諸要求に反対する事柄を示すにしても、依然として存続するからである [自由はいつさいの経験に依存しないアプリアリな純粹概念である、すなわちそれは「理性理念 (理性によつて存在すべきものとして考へられ創出されたもの) 」] なのである、われわれはここで、たとえば (39) における「友人関係における純粹な誠実さ」についてのカントの見解を思い出すべきであろう。 [③自然法則と経験] 他方において、生起するすべてのものが自然法則によつてくまなく規定されているということも [自由と] 同じく必然的であつて、この自然必然性もまた、まさしくそれが必然性の概念を、したがつてアプリアリな認識の概念を伴っているから、なんら経験概念ではない。けれども自然についてのこの [必然性の] 概念

は、経験によって確証〔検証〕されるし、しかも経験〔＝経験認識〕が、すなわち感官の諸対象を普遍的法則によって連関づける認識が、可能であるとする、この〔必然性の〕概念はまさに不可避的なものとして前提されなければならない。〔④意志の自由は理性理念である〕それゆえ、自由はたんに理性の理念であり、その客観的实在性そのものは不確実であるが、自然は悟性概念であって、それは自らの経験の実例において示すし、また必然的に示されなければならないのである。(Alle Menschen denken sich dem Willen nach als frei. Daher kommen alle Urtheile über Handlungen als solche, die hätten geschehen sollen, ob sie gleich nicht geschehen sind. Gleichwohl ist diese Freiheit kein Erfahrungsbegriff und kann es auch nicht sein, weil er immer bleibt, obgleich die Erfahrung das Gegentheil von denjenigen Forderungen zeigt, die unter Voraussetzung derselben als nothwendig vorgestellt werden. Auf der anderen Seite ist es eben so nothwendig, daß alles, was geschieht, nach Naturgesetzen unausbleiblich bestimmt sei, und diese Naturnothwendigkeit ist auch kein Erfahrungsbegriff, eben darum weil er den Begriff der Nothwendigkeit, mithin einer Erkenntnis a priori bei sich führt. Aber dieser Begriff von einer Natur wird durch Erfahrung bestätigt und muß selbst unvermeidlich vorausgesetzt werden, wenn Erfahrung, d. i. nach allgemeinen Gesetzen zusammenhängende Erkenntnis der Gegenstände der Sinne, möglich sein soll. Daher ist Freiheit nur eine Idee der Vernunft, deren objective Realität an sich zweifelhaft ist, Natur aber ein Verstandesbegriff, der seine Realität an Beispielen der Erfahrung beweiset und nothwendig beweisen muß.) (同上, 200頁)

(146)

〔理性の弁証論(自由と自然必然性)とその解決〕〔①理性の弁証論〕さて、意志にかんして、意志に添えられた自由〔にしたがう行為〕と、自然必然性〔にしたがう行為〕とは、矛盾するように見えるから、上に述べたことから理性の弁証論〔詭弁的矛盾 {第三章第一節(9) - (β) - (68) 参照}、〔見掛け上の矛盾〕{(147) 参照}〕が生じ、理性はこの岐路に際して、思弁的意図においては自然必然性の途のほうが自由の途よりもはるかに平坦で有用なことを見いだすが、しかし実践的意図においては、自由の小径こそがわれわれの行動に際してその理性使用を可能にする唯一の途である。〔②自由と自然のあいだに真の矛盾は存在しない〕それゆえ、理屈をこねて自由を否定することは、もっとも通常の人間理性にとって不可能であるのと同じように、きわめて細密な哲学にとっても不可能なのである。理性は、それゆえ、同一の人間の〔道徳的〕行為にかんして自由〔英知界における〕と自然必然性〔感性界における〕との間にはなんら真の矛盾〔弁証論の反対語〕は見いだせない、ということ的前提しなければならない。なぜなら、理性は、自然の概念〔理論理性として〕も自由の概念〔実践理性として〕も、ともに放棄することはできないからである。(Ob nun gleich hieraus eine Dialektik der Vernunft entspringt, da in Ansehung des Willens die ihm beigelegte Freiheit mit der Naturnothwendigkeit im Widerspruch zu stehen scheint, und bei dieser Wegescheidung die Vernunft in speculativer Absicht den Weg der Naturnothwendigkeit viel gebähnter und brauchbarer findet, als den der Freiheit: so ist doch in praktischer Absicht der Fußsteig der Freiheit der einzige, auf welchem es möglich ist, von seiner Vernunft bei unserem Thun und Lassen Gebrauch zu machen; daher wird es der subtilsten Philosophie eben so unmöglich, wie der gemeinsten Menschenvernunft, die Freiheit wegzuvernünfteln. Diese muß also wohl voraussetzen: daß kein wahrer Widerspruch zwischen Freiheit und Naturnothwendigkeit ebenderselben menschlichen Handlungen angetroffen werde,

denn sie kann eben so wenig den Begriff der Natur, als den der Freiheit aufgeben.)」(同上, 201頁)

(147)

「[自由はいかにして可能であるかは把握不可能である]けれども、たとえ自由がいかにして可能であるかが決して把握されることができないにしても、すくなくともこの見掛け上の矛盾[弁証論]は、説得できる仕方では除去されなければならない。なぜなら、もし自由についての考えそのものが自分自身と矛盾したり、またはそれと同じように必然的である自然に矛盾するならば、自由は自然必然性のためにまったく放棄されなければならないから。(Indessen muß dieser Scheinwiderspruch wenigstens auf überzeugende Art vertilgt werden, wenn man gleich, wie Freiheit möglich sei, niemals begreifen könnte. Denn wenn sogar der Gedanke von der Freiheit sich selbst, oder der Natur, die eben so nothwendig ist, widerspricht, so müßte sie gegen die Naturnothwendigkeit durchaus aufgegeben werden.)」(同上, 202頁)

(148)

「[思弁哲学と実践哲学 I] [①自由と自然法則との見掛け上の矛盾はいかにして解決できるか]だが自らを自由と考える主体が、自らを自由と言うときに、同じ[道徳的]行為にかんして自らが自然法則に従っていると想定する場合と同じ意味において、もしくはまったく同じ関係において、自分自身を考えているとすれば、上述の[自由と自然法則との]矛盾を免れることは不可能である。[②思弁哲学による弁証論解決の課題]それゆえ、思弁哲学がなおざりにできない課題は、すくなくとも次のことを示すことであって、それはつまり、[自由と自然法則との]矛盾にかんする思弁哲学の思い違い[弁証論]が生じてくるのは、われわれが人間を自由[英知界に属するもの]と言うときに、人間を自然の一部分として自然法則に服従するもの[感性界に属するもの]と見る場合とは、異なった意味と関係において人間を考えていること、また、この両者[自由(英知界)と自然法則(感性界)]は十分に両立するすることができるばかりでなく、[英知界と感性界の両方の世界にまたがって生きている]同一の主体において必然的に結合している[自由であるとともに自然法則にもしたがっている]と考えられなければならないこと、によるのである。[③自由と自然との必然的結合][後者の理由にかんしては]もし両者[自由と自然]が必然的に結合しているのではないとすれば、なぜわれわれは理性を[自由という]一つの理念[存在すべきものとしての自由]で悩まさなければならないのか、つまりこの[自由の]理念は十分に保証された[自然という]別の理念[存在すべきものとしての自然]と矛盾なく結合されるにもかかわらず、理性がその理論的使用において窮地に追い込まれるような仕事にわれわれを巻き込むのはなぜか、その理由をあげるができないであろう。[④思弁哲学は実践哲学に自由な途を切り開く]だがこの[弁証論解決の]任務はたんに思弁哲学にのみ課せられるのであり、思弁哲学はこれ[この任務の遂行]によって実践哲学に自由な途を開くのである。それゆえ、見掛け上の矛盾[弁証論]を取り除くか、それとも触れずにこれを放置するかは、哲学者の任意に委ねられているのではない。なぜなら、もし[弁証論を]放置すると、このこと[自由と自然必然性との弁証論]にかんする理論は、bonum vacans[相続人のない財産]となり、当然にも[自然必然性に基づく]宿命論者[経験論者]がそれ[bonum vacans]を占有し、一切の[自由に基づく]道徳哲学を、それが権限をもち占有しているとされる所有地[英知界]から追い出すことができるからである。(Es ist aber unmöglich, diesem Widerspruch zu entgehen, wenn

das Subject, was sich frei dünkt, sich selbst in demselben Sinne, oder in eben demselben Verhältnisse dächte, wenn es sich frei nennt, als wenn es sich in Absicht auf die nämliche Handlung dem Naturgesetze unterworfen annimmt. Daher ist es eine unnachlässliche Aufgabe der speculativen Philosophie : wenigstens zu zeigen, daß ihre Täuschung wegen des Widerspruchs darin beruhe, daß wir den Menschen in einem anderen Sinne und Verhältnisse denken, wenn wir ihn frei nennen, als wenn wir ihn als Stück der Natur dieser ihren Gesetzen für unterworfen halten, und daß beide nicht allein gar wohl beisammen stehen können, sondern auch als nothwendig vereinigt in demselben Subject gedacht werden müssen, weil sonst nicht Grund angegeben werden könnte, warum wir die Vernunft mit einer Idee belästigen sollten, die, ob sie sich gleich ohne Widerspruch mit einer anderen, genugsam bewährten vereinigen läßt, dennoch uns in ein Geschäfte verwickelt, wodurch die Vernunft in ihrem theoretischen Gebrauche sehr in die Enge gebracht wird. Diese Pflicht liegt aber bloß der speculativen Philosophie ob, damit sie der praktischen freie Bahn schaffe. Also ist es nicht in das Belieben des Philosophen gesetzt, ob er den scheinbaren Widerstreit heben, oder ihn unangeführt lassen will ; denn im letzten Falle ist die Theorie hierüber bonum vacans, in dessen Besitz sich der Fatalist mit Grunde setzen und alle Moral aus ihrem ohne Titel besessenen vermeinten Eigenthum verjagen kann.)」(同上, 202~203頁)

(149)

「[思弁哲学と実践哲学Ⅱ] けれども, ここで実践哲学の限界が始まるとはまだ言えない. と言うのは, こうした [弁証論をめぐる] 論争の調停は決して実践哲学に属する仕事ではなく, 実践哲学はただ思弁理性に対して, それが理論的 [思弁的] な問題において自分から巻き込まれている矛盾 [弁証論] に終止符を打つように要求するだけで, それによって実践理性は, 自分が定住しようと欲している土地 [英知界] の権利について争いを起こしかねない外部 [幸福主義] からの攻撃に対して, 平穏と安全を確保しようとしているからである. (Doch kann man hier noch nicht sagen, daß die Grenze der praktischen Philosophie anfangen. Denn jene Beilegung der Streitigkeit gehört gar nicht ihr zu, sondern sie fordert nur von der speculativen Vernunft, daß diese die Uneinigkeit, darin sie sich in theoretischen Fragen selbst verwickelt, zu Ende bringe, damit praktische Vernunft Ruhe und Sicherheit für äußere Angriffe habe, die ihr den Boden, worauf sie sich anbauen will, streitig machen könnten.)」(同上, 203~204頁)

(150)

「[通常の間人理性による意志の自由にたいする権利要求] [①理性の感性からの独立性] だが通常の間人理性すらも, 意志の自由に対する権利を要求するが, この権利要求は, 理性がたんに主観的=規定的な諸原因 [傾向性・欲求・衝動・欲望など] に依存していないという意識と, そうした独立性 [非依存性] を当然とする前提とに基づいていて, この種の原因はひっくりめてたんに感覚に属し, したがって感性という一般的名称の下に属しているものを形づくるのである. [②英知としての人間と現象としての人間] ところでこのような仕方では自分を英知と見る人間は, 自分が英知として意志を, したがって [道徳的行為の自由の] 原因性をそなえていると考える場合は, 自分を感性界の一現象 (人間は実際にもまたそうであるが) と認め, 自らの原因性を自然法則による外的規定に従わせる場合 [感性界] とは違って, 自分を事物の異なった秩序 [英知界] のうちへ, そしてまったく別種の規定根拠 [自由の理念] との関係のうちへと置き移すのである.

〔③感性界と英知界は同時に成立しなければならない：弁証論の解決〕しかしかれ〔自分を英知と見る人間〕がすぐに気付くことは、この両者〔英知と現象〕が同時に成立することができる、いなそれどころか、この両者は同時に成立しなければならない、ということである。現象における物〔人間〕（これは感性界に属する）がある種の諸法則〔自然法則〕に従っており、まさに同じ物〔人間〕が物自体もしくは存在者それ自体〔これは英知界に属する〕としてはこの諸法則〔自然法則〕に依存していないということは、なんら矛盾を含んでいないし、また人間が自分自身をこの二重の仕方で〔英知界における自分と感性界における自分を重ね合わせて〕表象し思考しなければならないことは、前者〔現象〕にかんしては、感官によって触発された対象〔客観〕としての自分自身の意識に基づき、後者〔英知〕にかんしては、英知としての、すなわち理性〔の実践的〕使用において感性的印象に依存しないものとしての（したがって悟性界に属するものとしての）自分自身の意識に基づくからなのである。（Der Rechtsanspruch aber selbst der gemeinen Menschenvernunft auf Freiheit des Willens gründet sich auf das Bewußtsein und die zugestandene Voraussetzung der Unabhängigkeit der Vernunft von bloß subjectiv=bestimmenden Ursachen, die insgesamt das ausmachen, was bloß zur Empfindung, mithin unter die allgemeine Benennung der Sinnlichkeit gehört. Der Mensch, der sich auf solche Weise als Intelligenz betrachtet, setzt sich dadurch in eine andere Ordnung der Dinge und in ein Verhältnis zu bestimmenden Gründen von ganz anderer Art, wenn er sich als Intelligenz mit einem Willen, folglich mit Causalität, begibt denkt, als wenn er sich wie ein Phänomen in der Sinnenwelt (welches er wirklich auch ist) wahrnimmt und seine Causalität äußerer Bestimmung nach Naturgesetzen unterwirft. Nun wird er bald inne, daß beides zugleich stattfinden könne, ja sogar müsse. Denn daß ein Ding in der Erscheinung (das zur Sinnenwelt gehörig) gewissen Gesetzen unterworfen ist, von welchen eben dasselbe als Ding oder Wesen an sich selbst unabhängig ist, enthält nicht den mindesten Widerspruch; daß er sich selbst aber auf diese zwiefache Art vorstellen und denken müsse, beruht, was das erste betrifft, auf dem Bewußtsein seiner selbst als durch Sinne afficirten Gegenstandes, was das zweite anlangt, auf dem Bewußtsein seiner selbst als Intelligenz, d. i. als unabhängig im Vernunftgebrauch von sinnlichen Eindrücken (mithin als zur Verstandeswelt gehörig).」(同上, 204~205頁)

(151)

「〔人間は英知としてのみ「本来の自己」である〕〔①自由な意志〕こうした理由から、人間は、たんに自分の欲求や傾向性に属するもの〔感性〕をなんら考慮する必要のない〔自由な〕意志をそなえているとあえて主張し、他方において、一切の欲求や感性的刺激を無視することによってのみ生ずることができる〔自由な道徳的〕行為を、自らによって可能である、いなそれどころか必然的である、と考えるのである。〔②純粋理性のみが道徳法則を与える〕こうした〔道徳的〕行為の原因性は、英知としてのかれのうちにあり、英知界の原理〔自由〕に従う作用や行為の〔道徳〕法則のうちにあるが、しかしかれがこの英知界について知ることは、そこではただ理性のみが、しかも感性に依存しない純粋な理性のみが〔道徳〕法則を与える、ということだけであり、またかれはそこ〔英知界〕では英知としてのみ本来の自己である（これに反して〔感性的〕人間としてはかれは自分自身〔本来の自己〕のたんなる現象である）から、かの〔道徳〕法則はかれに直接かつ定言的にかかわる、ということなのである。〔③英知としての人間は感性にたいする讓歩にのみ責任を負うべきである〕したがって、傾向性や衝動が（したがって感性界の全自

然が) かれを刺激して赴かせる目標は、英知としてのかれの意欲の〔道德〕法則をなんら損なうことはありえないし、それどころか〔英知としての〕かれはそうした傾向性や衝動〔の存在それ自体〕に責任を負う必要はなく、それら〔傾向性や衝動〕を自らの本来の自己すなわちかれの〔自由な〕意志に帰す必要もないのであって、ただそれら〔傾向性や衝動〕が〔英知としての〕かれの格率に影響することを許し、意志の理性法則〔自由の法則＝定言命法〕が損なわれた場合に、それら〔傾向性や衝動〕に対してかれが行った譲歩に責任を負うべきなのである。(Daher kommt es, daß der Mensch sich eines Willens anmaßt, der nichts auf seine Rechnung kommen läßt, was bloß zu seinen Begierden und Neigungen gehört, und dagegen Handlungen durch sich als möglich, ja gar als nothwendig denkt, die nur mit Hintansetzung aller Begierden und sinnlichen Anreizungen geschehen können. Die Causalität derselben liegt in ihm als Intelligenz und in der Gesetzen der Wirkungen und Handlungen nach Principien einer intelligibelen Welt, von der er wohl nichts weiter weiß, als daß darin lediglich die Vernunft und zwar reine, von Sinnlichkeit unabhängige Vernunft das Gesetz gebe, imgleichen da er daselbst nur als Intelligenz das eigentliche Selbst (als Mensch hingegen nur Erscheinung seiner selbst) ist, jene Gesetze ihn unmittelbar und kategorisch angehen, so daß, wozu Neigungen und Antriebe (mithin die ganze Natur der Sinnenwelt) anreizen, den Gesetzen seines Wollens als Intelligenz keinen Abbruch thun kann, so gar, daß er die erstere nicht verantwortet und seinem eigentlichen Selbst, d. i. seinem Willen, nicht zuschreibt, wohl aber die Nachsicht, die er gegen sie tragen möchte, wenn er ihnen zum Nachtheil der Vernunftgesetze des Willens Einfluß auf seine Maximen einräumte.)」(同上, 206~207頁)

(152)

〔〔実践理性と英知界〕①〔実践理性がみずからの限界を越えるとき〕実践理性は、自分を悟性界のうちへと移入して考えることによって、些かも自らの限界を越えていないが、しかし自分を悟性界のうちへと移入して直観したり、移入して感覚したりしようとする、限界を越えることになる。②〔実践理性がみずからを英知界のうちへと移入して考えることの積極性〕〔実践理性が〕自分を英知界のうちへと移入して考えることは、〔自由な〕意志の規定に際して〔実践〕理性になんら〔道德〕法則を与えることのない感性界にかんしては、たんに消極的な思想〔考へ〕にすぎないが、しかし次の一点にかんしてだけは積極的であって、それはつまり、消極的な規定としてのかの自由〔「自由とは、この原因性が、それを規定する外からの原因に依存しないで作動できるときにもつ特性」(126)、さらに積極的自由については(127)を参照〕が、同時に理性の(積極的な)能力、しかもわれわれが意志とよぶ理性の原因性と結び付けられ、その結果、〔道德的〕行為の原理が理性原因の本質的性質に、つまり格率が〔道德〕法則として普遍妥当性をもつという条件に、適合する形で〔道德的〕行為がなされる、という点なのである。③〔実践理性の越権〕しかし実践理性が、悟性界からさらに意志の客観〔対象・目的〕をも、すなわち動因をも取り出そうとすると〔すなわち意志の形式だけでなく、意志の実質をも、ということ〕、実践理性は自らの限界を越え、自分がなにも知らない事柄〔心の不死・神の現存など〕を知っている(kennen, wissen)と不当に主張することになる。④〔悟性界と自由の法則もしくは道德性の根拠〕悟性界の概念は、それゆえ、理性が自分自身を実践的〔道德的〕と考えるために、現象〔感性界・自然〕の外部にどうしてもとらなければならないと考える一つの立場にすぎないのである。理性が自分自身を実践的〔意志の道德的規定根拠を与えるもの〕と考えることは、もし

感性 [自然] の影響が人間にとって決定的であるならば [自余の動物のばあいと同じように、意志の自由の存立の余地がないならば]、不可能であろうが、しかし人間に英知としての、したがって理性的であって理性によって活動する、すなわち自由^にに作動する原因としての、自らの [本来の] 自己の意識が否認されるべきでない限りでは、やはり必然的 [どうしても必要] なのである。〔⑤英知界における意志の自律〕この思想は、実際のところ、感性界に妥当する機械的自然の秩序や立法とは異なる秩序や立法の理念をもたらし、英知界 (すなわち物自体としての理性的存在者の全体) の概念を必然的なものとするが、しかしその際たんに英知界の形式的条件 [であって実質的条件ではない] に従って考える、つまり法則としての意志の格率の普遍性に、したがってそのみが意志の自由と両立できる意志の自律に即して考える、というだけで、それ以上の不当な主張はすこしも含んでいない。〔⑥感性界における意志の他律〕これに反して、客観 [対象・目的] に応じて規定されるすべての法則は他律を与えるが、この他律は自然法則においてのみ見いだされ、そしてただ感性界においてのみ妥当する。(Dadurch, daß die praktische Vernunft sich in eine Verstandeswelt hinein denkt, überschreitet sie gar nicht ihre Grenzen, wohl aber wenn sie sich hineinschauen, hineinempfinden wollte. Jenes ist nur ein negativer Gedanke in Ansehung der Sinnenwelt, die der Vernunft in Bestimmung des Willens keine Gesetze giebt, und nur in diesem einzigen Punkte positiv, daß jene Freiheit als negative Bestimmung zugleich mit einem (positiven) Vermögen und sogar mit einer Causalität der Vernunft verbunden sei, welche wir einen Willen nennen, so zu handeln, daß das Princip der Handlungen der wesentlichen Beschaffenheit einer Vernunftursache, d. i. der Bedingung der Allgemeingültigkeit der Maxime als eines Gesetzes, gemäß sei. Würde sie aber noch ein Object des Willens, d. i. eine Bewegungsursache, aus der Verstandeswelt herholen, so überschritte sie ihre Grenzen und maßte sich an, etwas zu kennen, wovon sie nichts weiß. Der Begriff einer Verstandeswelt ist also nur ein Standpunkt, den die Vernunft sich genöthigt sieht, außer den Erscheinungen zu nehmen, um sich selbst als praktisch zu denken, welches, wenn die Einflüsse der Sinnlichkeit für den Menschen bestimmend wären, nicht möglich sein würde, welches aber doch nothwendig ist, wofern ihm nicht das Bewußtsein seiner selbst als Intelligenz, mithin als vernünftige und durch Vernunft thätige, d. i. frei wirkende, Ursache abgesprochen werden soll. Dieser Gedanke führt freilich die Idee einer anderen Ordnung und Gesetzgebung, als die des Naturmechanismus, der die Sinnenwelt trifft, herbei und macht den Begriff einer intelligibelen Welt (d. i. das Ganze vernünftiger Wesen, als Dinge an sich selbst) nothwendig, aber ohne die mindeste Anmaßung, hier weiter als bloß ihrer formalen Bedingung nach, d. i. der Allgemeinheit der Maxime des Willens als Gesetz, mithin der Autonomie des letzteren, die allein mit der Freiheit desselben bestehen kann, gemäß zu denken; da hingegen alle Gesetze, die auf ein Object bestimmt sind, Heteronomie geben, die nur an Naturgesetzen angetroffen werden und auch nur die Sinnenwelt treffen kann.)」(同上, 207~209)

(153)

「[意志の自由がいかにして可能であるかの解明は不可能である] けれども、理性が、いかにして純粋理性が実践的 [道徳的] であることができるかをあえて解明しようとするならば、そしてこのことは、いかにして [意志の] 自由が可能であるかを解明するという課題とまったく同じことになろうが、その場合には理性は自らの全限界を越え出ることになろう。(Aber alsdann würde die Vernunft alle ihre Grentze überschreiten, wenn sie es sich zu erklären unterfinge, wie

reine Vernunft praktisch sein könne, welches völlig einerlei mit der Aufgabe sein würde, zu erklären, wie Freiheit möglich sei.)」(同上, 210頁)

(154)

「[意志の自由はたんなる理念である] [①可能的経験内のものしか解明できない] と言うのも、われわれが解明できるのは、われわれがそのものを、なんらかの可能な経験において与えられることができる対象の[自然]法則に帰せしめることができる、そうしたものでしかないからである。[②意志の自由は自然法則によって説明不可能] だが[意志の]自由はたんなる理念[存在すべきもの]であって、その客観的実在性は、いかなる仕方でも自然法則によっては説明されることができず、したがってまたなんらかの可能的経験のうちで説明されることはできない。それゆえ、自由の理念は、なんらかの類比によってこの理念そのものにある実例を与えることはまったく不可能だから、この理念は決して把握されることはできず、たんに洞察されることすらできないのである。[③意志の自由の理念は理性の必然的前提としてのみ妥当する] 自由の理念は、意志を、すなわちたんなる欲求能力とは異なった能力(すなわち、英知として、したがって理性の[道徳]法則に従い、自然本能に依存せずに自らを[道徳的]行為へと規定する能力)を自覚していると信ずる(glauben)[理性的]存在者において、[実践]理性の必然的前提としてのみ妥当する。[④意志の自由の理念的根拠] だが自然法則による規定が終止すれば、一切の解明もまた終止し、残るのはただ弁護だけで、言いかえれば、事物の本質をより深く洞見したと称し、それを理由に大胆にも[意志の]自由を不可能であると解明するひとびとの反論を駆逐することだけなのである。すなわちかれらに示すことができるのは次のことだけであって、それはつまり、かれらが[意志の]自由のうちに発見したと称する矛盾[弁証論]は、かれらが人間の[道徳的]行為にかんして自然法則を妥当させるために人間を必然的に現象と[のみ]見なければならなかったし、次いで英知としての人間をまた物自体とも考えるべきだと要求されたのに、かれらは依然として人間をその場合にも現象と[のみ]見た、ということのうちにのみ存するのである。この場合には実際、人間の原因性(すなわち人間の意志)を感性界のあらゆる自然法則から分離することは、同一の主体において、矛盾[弁証論]を引き起こすことになろうが、しかしかれらが、現象の背後にはなお事象それ自体[物自体]が(隠されてではあるが)根底に存するはずであり、この事象それ自体[物自体]の作用法則[道徳法則]は、その現象を支配する[自然]法則と一様であることを期待できない、ということをよく考慮し、当然にもそのことを承認(eingestehen)しようとするならば、この矛盾[弁証論]は解消するのである。(Denn wir können nichts erklären, als was wir auf Gesetze zurückführen können, deren Gegenstand in irgend einer möglichen Erfahrung gegeben werden kann. Freiheit aber ist eine bloße Idee, deren objective Realität auf keine Weise nach Naturgesetzen, mithin auch nicht in irgend einer möglichen Erfahrung dargethan werden kann, die also darum, weil ihr selbst niemals nach irgend einer Analogie ein Beispiel untergelegt werden mag, niemals begriffen, oder auch nur eingesehen werden kann. Sie gilt nur als nothwendige Voraussetzung der Vernunft in einem Wesen, das sich eines Willens, d. i. eines vom bloßen Begehrungsvermögen noch verschiedenen Vermögens, (nämlich sich zum Handeln als Intelligenz, mithin nach Gesetzen der Vernunft unabhängig von Naturinstincten zu bestimmen) bewußt zu sein glaubt. Wo aber Bestimmung nach Naturgesetzen aufhört, da hört auch alle Erklärung auf, und es bleibt nichts übrig als Vertheidigung, d. i. Abtreibung der Einwürfe derer, die tiefer in das Wesen der Dinge geschaut zu haben vorgeben und darum die Freiheit

dreust für unmöglich erklären. Man kann ihnen nur zeigen, daß der vermeintlich von ihnen darin entdeckte Widerspruch nirgend anders liege als darin, daß, da sie, um das Naturgesetz in Ansehung menschlicher Handlungen geltend zu machen, den Menschen nothwendig als Erscheinung betrachten mußten und nun, da man von ihnen fordert, daß sie ihn als Intelligenz auch als Ding an sich selbst denken sollten, sie ihn immer auch da noch als Erscheinung betrachten, wo denn freilich die Absonderung seiner Causalität (d. i. seines Willens) von allen Naturgesetzen der Sinnenwelt in einem und demselben Subjecte im Widerspruche stehen würde, welcher aber wegfällt, wenn sie sich besinnen und wie billig eingestehen wollten, daß hinter den Erscheinungen doch die Sachen an sich selbst (obzwar verborgen) zum Grunde liegen müssen, von deren Wirkungsgesetzen man nicht verlangen kann, daß sie mit denen einerlei sein sollten, unter denen ihre Erscheinungen stehen.)」(同上, 210~211頁)

(155)

「[道德法則にたいする関心と本来の道德的感情] 意志の自由を解明することが主観的に [人間には] 不可能であることは、人間が道德法則に対してもつことができるような関心*を発見し把握することが不可能であることと同じである。だがそれにもかかわらず、人間は現実に道德法則に対して関心をもっており、われわれはわれわれのうちにあるその関心の基礎を道德的感情とよぶのであるが、しかしあるひとつとによってこの [道德的] 感情が誤ってわれわれの道德的判定 [価値判断] の規準と称せられたのであって、それが誤りであるのは、この [道德的] 感情はむしろ [道德] 法則が意志に及ぼす主観的結果と見られなければならない、意志に対しては理性のみが客観的根拠を与えるからなのである。

* [関心] 関心とは、理性がそれによって実践的となる、すなわち意志を規定する原因となるところのものである [理性→関心→意志]。[①理性の純粹な直接的関心] それゆえ、理性的存在者についてのみ、そのものがあるものに関心をもつ、と言えるのであって、理性を欠いた生物はただ感性的な衝動を感じるだけである。理性が [道德的] 行為に対して直接的な関心をもつのは、[道德的] 行為の格率の普遍妥当性が意志の十分な規定根拠である場合に限られる。このような関心だけが純粹である。[②理性の經驗的な間接的な関心] だが理性が、欲求の他の客観 [対象・目的] を介してのみ、もしくは主観の特殊な感情の前提の下においてのみ意志を規定できる場合は、理性は [道德的] 行為に対してたんに間接的な関心をもつだけであって、ところで理性は、それだけでは意志の客観をも意志の基礎にある特殊な感情をも、経験の助けを借りずに見いだすことはできないから、そこでこの間接的な関心はたんに經驗的であって、純粹な理性関心ではないことになろう。[③理性の論理的関心] なお理性の論理的関心 (理性の洞察を促進するための) は決して直接的ではなく、理性使用のさまざまな意図を前提とするのである。(Die subjective Unmöglichkeit, die Freiheit des Willens zu erklären, ist mit der Unmöglichkeit, ein Interesse* ausfindig und begreiflich zu machen, welches der Mensch an moralischen Gesetzen nehmen könne, einerlei; und gleichwohl nimmt er wirklich daran ein Interesse, wozu wir die Grundlage in uns das moralische Gefühl nennen, welches fälschlich für das Richtmaß unserer sittlichen Beurteilung von einigen ausgegeben worden, da es vielmehr als die subjective Wirkung, die das Gesetz auf den Willen ausübt, angesehen werden muß, wozu Vernunft allein die objectiven Gründe hergiebt.

「*Interesse ist das, wodurch Vernunft praktisch, d. i. eine den Willen bestimmende Ursache, wird. Daher sagt man nur von einem vernünftigen Wesen, daß es woran ein Interesse nehme, vernunftlose Geschöpfe fühlen nur sinnliche Antriebe. Ein unmittelbares Interesse nimmt die Vernunft nur alsdann an der Handlung, wenn die Allgemeingültigkeit der Maxime derselben ein gnugsamer Bestimmungsgrund des Willens ist. Ein solches Interesse ist allein rein. Wenn sie aber den Willen nur mittelst eines anderen Objects des Begehrens, oder unter Voraussetzung eines besonderen Gefühls des Subjects bestimmen kann, so nimmt die Vernunft nur ein mittelbares Interesse an der Handlung, und da Vernunft für sich allein weder Objecte des Willens, noch ein besonderes ihm zu Grunde liegendes Gefühl ohne Erfahrung ausfindig machen kann, so würde das letztere Interesse nur empirisch und kein reines Vernunftinteresse sein. Das logische Interesse der Vernunft (ihre Einsichten zu befördern) ist niemals unmittelbar, sondern setzt Absichten ihres Gebrauchs voraus.)」(同上, 212~213頁)

(156)

「[道徳法則の遂行と快の感情・適意の感情] [①感性と理性] 感性的に [も] 触発される理性的存在者に対して, ひとり理性のみが「べし (Sollen)」として命ずる事柄を [実際に] 意欲するためには, 義務を履行することに快の感情や適意の感情を注入する理性能力が確かに必要であり, 理性の原理 [自律] に従って感性を規定する理性の原因性 [道徳法則=定言命法] が必要である. [②道徳法則と快不快の感情] しかし, 感性的なものをなんら自分自身のうちに含んでいないたんなる思想 [道徳法則=定言命法] が, いかにして快不快の感覚を生むかを洞察することは, すなわちそれ [そのこと] をアプリアリに把握することは, まったく不可能である. なぜなら, これ [理性の原因性] はある特殊な種類の原因性であって, この原因性については, すべての原因性についてと同様, われわれはなにか一つアプリアリに規定することはできず, それ [この原因性] については経験にのみ尋ねなければならないからである. [③理性の原因性は経験的にも不可であり, それゆえその説明はおよそ人間には不可能なのである] ところで経験は, 原因結果の関係を二つの経験対象の間において示すことができず, しかしここでは純粹 [実践] 理性 [英知界に属する] がたんなる理念 (これはいかなる経験の対象をも手渡さない [なぜなら理念は「存在すべきもの」として「経験的には存在していないもの」であるから]) を介して, ある結果 [快不快の感覚] の, そしてこの結果は確かに経験 [感性界に属する] のうちにあるのだが, そうした [感性界の] 結果の [英知界の] 原因であるべきだとされる [この点で, 経験が二つの経験対象の間において示す原因結果の関係とはまったく異質である] から, そこで [道徳] 法則としての格率の普遍性が, したがって道徳性 [原因] が, いかにして, そしてなにゆえにわれわれの関心を引くかということ [結果] の [原因結果の関係の] 説明は, われわれ人間にはまったく不可能なのである [われわれ人間は英知界についてはなにも知らない]. [④英知としての「本来の自己」と他律] だが次のことだけは確実である. すなわちそれは, [道徳] 法則がわれわれにとって妥当性をもつのは, その [道徳] 法則が関心を引くからではなく (なぜなら, このことは他律であり, 実践理性が感性に, 根底にある感情に依存することであって, その場合には実践理性は, 決して道徳的 [自律的] に立法するものではありえないことになろうから), 逆に [道徳] 法則は, それが人間としてのわれわれに妥当するがゆえに, 関心を引く, ということである. というのも, [道徳] 法則は英知としてのわれわれの [理性的] 意志から, したがってわれわれの本来の自己 (das eigentliche Selbst) から生じたものだからである. だがたんなる [感

性界の] 現象に属するものは、理性によって必然的に事柄それ自体 [物自体] の性質に従属させられる。(Um das zu wollen, wozu die Vernunft allein dem sinnlich=afficiten vernünftigen Wesen das Sollen vorschreibt, dazu gehört freilich ein Vermögen der Vernunft, ein Gefühl der Lust oder des Wohlgefallens an der Erfüllung der Pflicht einzuflößen, mithin eine Causalität derselben, die Sinnlichkeit ihren Principien gemäß zu bestimmen. Es ist aber gänzlich unmöglich, einzusehen, d. i. a priori begreiflich zu machen, wie ein bloßer Gedanke, der selbst nichts Sinnliches in sich enthält, eine Empfindung der Lust oder Unlust hervorbringe; denn das ist eine besondere Art von Causalität, von der wie von aller Causalität wir gar nichts a priori bestimmen können, sondern darum allein die Erfahrung befragen müssen. Da diese aber kein Verhältnis der Ursache zur Wirkung, als zwischen zwei Gegenständen der Erfahrung an die Hand geben kann, hier aber reine Vernunft durch bloße Ideen (die gar keinen Gegenstand für Erfahrung abgeben) die Ursache von einer Wirkung, die freilich in der Erfahrung liegt, sein soll, so ist die Erklärung, wie und warum uns die Allgemeinheit der Maxime als Gesetzes, mithin die Sittlichkeit interessire, uns Menschen gänzlich unmöglich. So viel ist nur gewiß: daß es nicht darum für uns Gültigkeit hat, weil es interessirt (denn das ist Heteronomie und Abhängigkeit der praktischen Vernunft von Sinnlichkeit, nämlich einem zum Grunde liegenden Gefühl, wobei sie niemals sittlich gesetzgebend sein könnte), sondern daß es interessirt, weil es für uns als Menschen gilt, da es aus unserem Willen als Intelligenz, mithin aus unserem eigentlichen Selbst entsprungen ist; was aber zur bloßen Erscheinung gehört, wird von der Vernunft nothwendig der Beschaffenheit der Sache an sich selbst untergeordnet.) (同上, 214~215頁)

(157)

[[定言命法はいかにして可能であるか] [①定言命法の可能の根拠の解明の限定性] それゆえ、定言命法はいかにして可能であるか、という問いは、定言命法がその下でのみ可能な唯一の前提を、すなわち [意志の] 自由の理念を、示すことができ、またこの前提の [可能性のみならず] 必然性を洞察することができる、という範囲内でのみ答えられることができるのであって、理性の実践的使用のためには、すなわちこの [定言] 命法の妥当性を、したがってまた道徳法則の妥当性を確信するためには、これで十分なのである。だがこの前提そのもの [意志の自由の理念] がいかにして可能であるかは、いかなる人間理性をもってしても決して洞察されないのである。[②意志の自律=自由] ところで、英知の意志の自由という前提の下で、[自由な] 意志がその下でのみ規定されることのできる形式的条件として、意志の自律 [=自由] ということが必然的に帰結する。この意志の自由 [=自律] を前提することは、ただたんに (感性界の諸現象を結合する際に用いられる自然必然性の原理と矛盾することなく) まったく可能である (思弁哲学がこのことを示すことができるように) のみならず、[意志の] 自由を実践的に、すなわち [自由の] 理念において、すべての随意的 [道徳的] 行為の基礎に条件として置くことは、[実践] 理性による自らの原因性、したがって意志 [の自由] (これは [自然的] 欲求から区別される) を自覚している理性的存在者にとっては、それ以上の条件を必要とせず必然的なのである。[③純粹理性はいかにして実践的道徳的でありえるかの解明は不可能] だが純粹理性が、どこかほかからとられてくるような他の動機をもたずに、いかにしてそれだけで実践的 [道徳的] であるか、すなわちひとがあらかじめそれについてなんらかの関心をいだくような意志のすべての実質 (対象) をもたずに、いかにして理性のすべての格率が [道徳] 法則として普遍妥当性をもつというたん

なる原理（この原理は確かに純粹実践理性の形式と言えよう）がそれだけで動機を与え、また純粹に道徳的と言えるような関心を引き起こすのか、言いかえれば、いかにして純粹理性は実践的〔道徳的〕であることができるのか、これを解明することはあらゆる人間理性にとってまったく不可能であり、これを解明を求め一切の労苦は徒勞に終わるのである。（Die Frage also; wie ein kategorischer Imperativ möglich sei, kann zwar so weit beantwortet werden, als man die einzige Voraussetzung angeben kann, unter der er allein möglich ist, nämlich die Idee der Freiheit, imgleichen als man die Nothwendigkeit dieser Voraussetzung einsehen kann, welches zum praktischen Gebrauche der Vernunft, d. i. zur Überzeugung von der Gültigkeit dieses Imperativs, mithin auch des sittlichen Gesetzes hinreichend ist, aber wie diese Voraussetzung selbst möglich sei, läßt sich durch keine menschliche Vernunft jemals einsehen. Unter Voraussetzung der Freiheit des Willens einer Intelligenz aber ist die Autonomie desselben, als die formale Bedingung, unter der er allein bestimmt werden kann, eine nothwendige Folge. Diese Freiheit des Willens vorauszusetzen, ist auch nicht allein (ohne in Widerspruch mit dem Princip der Naturnothwendigkeit in der Verknüpfung der Erscheinungen der Sinnenwelt zu gerathen) ganz wohl möglich (wie die speculative Philosophie zeigen kann), sondern auch sie praktisch, d. i. in der Idee, allen seinen willkürlichen Handlungen als Bedingung unterzulegen, ist einem vernünftigen Wesen, das sich seiner Causalität durch Vernunft, mithin eines Willens (der von Begierden unterschieden ist) bewußt ist, ohne weitere Bedingung nothwendig. Wie nun aber reine Vernunft ohne andere Triebfedern, die irgend woher sonst genommen sein mögen, für sich selbst praktisch sein, d. i. wie das bloße Princip der Allgemeingültigkeit aller ihrer Maximen als Gesetze (welches freilich die Form einer reinen praktischen Vernunft sein würde) ohne alle Materie (Gegenstand) des Willens, woran man zum voraus irgend ein Interesse nehmen dürfe, für sich selbst eine Triebfeder abgeben und ein Interesse, welches rein moralisch heißen würde, bewirken, oder mit anderen Worten, wie reine Vernunft praktisch sein könne, das zu erklären, dazu ist alle menschliche Vernunft gänzlich unvermögend, und alle Mühe und Arbeit, hievon Erklärung zu suchen, ist verloren.)」(同上, 216~217頁)

(158)

「〔理念と知識〕〔①意志の自由の可能性は解明不可能〕この間の事情は、あたかも私が、意志の原因性としての自由そのものがいかにして可能であるかを基礎づけようと試みる場合と同じである。なぜなら、その場合に私は哲学的な解明根拠を失っており、しかもほかのいかなる解明根拠ももたないからである。〔②英知界についての知識〕なるほど私は、私になお残されている英知界のうちの、英知たちの世界のうちの、夢想しながら巡ることはできるであろう。だがたとえ私が英知界について、十分根拠のある理念をもつとしても、私はこの世界については些かの知識 (Kenntnis) ももたず、また私に自然にそなわる理性能力がいくら努力してもこの知識に到達することはできないのである。英知界とは、私が感性界に属するすべてのもの〔傾向性・衝動・欲望・本能など〕を私の意志の規定根拠から排除した後に、なお残っているあるもの〔定言命法＝道徳法則〕を意味するにすぎないのであり、なぜ排除したかと言えば、感性の領域に由来する動因の原理〔傾向性・衝動・欲望・本能など〕を制限するためだけであって、この制限は私が感性の領域を限界づけ、この領域が決して一切切切を含むのではなく〔経験論の考えとはちがって〕、その〔感性界の〕ほかになおそれ以上のもの (noch mehr) があるのを示すことによって

なされるのであるが、しかしこの「より以上のもの (dieses Mehrere)」について、私はこれ以上にはなにも知らないのである (kenne ich nicht weiter). [③英知界という理念] こうした理想 [感性界から純化された英知界] を考える純粹 [実践] 理性から、すべての実質を、すなわち客観の認識を除いた後に私に残されるのは、形式だけである。つまり私に残されるのは、格率が普遍的に妥当すべきであるという実践的 [道徳的] 法則と、この法則に適合して、[純粹実践] 理性を純粹悟性界とのかかわりで可能な作用原因として、すなわち [自由=自律的な] 意志を規定する原因として、考える (denken), ということだけである。ここでは動機はまったく欠けていなければならない。と言うよりは、英知界のこの理念そのものが動機であり、[純粹実践] 理性がそれに対して根源的に関心をもつ当のものである、と言うべきであろう。だがこのことを把握すること (begreiflich zu machen) は、まさにわれわれにとって解決不可能な (nicht auflösen können) 課題なのである。(Es ist eben dasselbe, als ob ich zu ergründen suchte, wie Freiheit selbst als Causalität eines Willens möglich sei. Denn da verlasse ich den philosophischen Erklärungsgrund und habe keinen anderen. Zwar könnte ich nun in der intelligibelen Welt, die wir noch übrig bleibt, in der Welt der Intelligenzen, herumschwärmen; aber ob ich gleich davon eine Idee habe, die ihren guten Grund hat, so habe ich doch von ihr nicht die mindeste Kenntnis und kann auch zu dieser durch alle Bestrebung meines natürlichen Vernunftvermögens niemals gelangen. Sie bedeutet nur ein Etwas, das da übrig bleibt, wenn ich alles, was zur Sinnenwelt gehört, von den Bestimmungsgründen meines Willens ausgeschlossen habe, bloß um das Princip der Bewegursachen aus dem Felde der Sinnlichkeit einzuschränken, dadurch daß ich es begrenze und zeige, daß es nicht Alles in Allem in sich fasse, sondern daß außer ihm noch mehr sei; dieses Mehrere aber kenne ich nicht weiter. Von der reinen Vernunft, die dieses Ideal denkt, bleibt nach Absonderung aller Materie, d. i. Erkenntnis der Objecte, mir nichts als die Form übrig, nämlich das praktische Gesetz der Allgemeingültigkeit der Maximen und diesem gemäß die Vernunft in Beziehung auf eine reine Verstandeswelt als mögliche wirkende, d. i. als den Willen bestimmende, Ursache zu denken; die Triebfeder muß hier gänzlich fehlen; es müßte denn diese Idee einer intelligibelen Welt selbst die Triebfeder oder dasjenige sein, woran die Vernunft ursprünglich ein Interesse nähme; welches aber begreiflich zu machen gerade die Aufgabe ist, die wir nicht auflösen können.)」(同上, 217~218頁)

(159)

「[一切の道徳的探究の究極の限界] [①探究の限界設定の意義] ここにこそ、一切の道徳的探究の究極の限界がある。だがこの限界を定めることは、以下の理由からしてもきわめて重要なことであって、その理由は、一方では、[実践] 理性が感性界のうちで、道徳を損なうような仕方、最上の動因や、把握可能であっても経験的な関心を探しまわることがないようにするためであり、他方では、[実践] 理性が英知界の名の下で、[実践] 理性にとって空虚な、超越的概念の空間のうちで、むなしくはばたくだけで前進せず、妄想のうちで自己を失うということがないようにするためである。[②理念・知識・理性的信仰] ともあれ、われわれ自身が理性的存在者として(もっともわれわれは他方では同時に感性界の成員であるが) 属する英知すべての全体としての純粹悟性界の理念 (die Idee einer reinen Verstandeswelt) は、たとえあらゆる知識 (alles Wissen) がこの世界 [英知界] の際で終わるにしても、理性的信仰 (ein vernünftiger Glaube) のために有用で許された理念として、つねに存続する。[③英知界・諸目的の国・道徳法則] ま

たわれわれは、われわれが自由の格率に、その格率があたかも自然の法則であるかのように従って慎重に行動するときのみ、[諸] 目的それ自体の（もろもろの理性的存在者の）普遍的な国に成員として所属することができるが、英知界の理念（Idee）はこの目的の国という崇高な理想（Ideal）を介して、道德法則に対する生き生きとした関心（Interesse）をわれわれのうちに引き起こすのである。（Hier ist nun die oberste Grenze aller moralischen Nachforschung, welche aber zu bestimmen, auch schon darum von großer Wichtigkeit ist, damit die Vernunft nicht einerseits in der Sinnenwelt auf eine den Sitten schädliche Art nach der obersten Bewegursache und einem begreiflichen, aber empirischen Interesse herumsuche, andererseits aber, damit sie auch nicht in dem für sie leeren Raum transscendenter Begriffe unter dem Namen der intelligibelen Welt kraftlos ihre Flügel schwingt, ohne von der Stelle zu kommen, und sich unter Hirngespinsten verliere. Übrigens bleibt die Idee einer reinen Verstandeswelt als eines Ganzen aller Intelligenzen, wozu wir selbst als vernünftige Wesen (obgleich andererseits zugleich Glieder der Sinnenwelt) gehören, immer eine brauchbare und erlaubte Idee zum Behufe eines vernünftigen Glaubens, wenn gleich alles Wissen an der Grenze derselben ein Ende hat, um durch das herrliche Ideal eines allgemeinen Reichs der Zwecke an sich selbst (vernünftiger Wesen), zu welchem wir nur alsdann als Glieder gehören können, wenn wir uns nach Maximen der Freiheit, als ob sie Gesetze der Natur wären, sorgfältig verhalten, ein lebhaftes Interesse an dem moralischen Gesetze in uns zu bewirken.)」(同上, 219~220頁)

[結びの注 (Schlußanmerkung.)]

(160)

「[哲学に要求できるすべて] [①理性認識と必然性] 自然にかんする理性の思弁的 [理論的] 使用は、世界のなんらかの最上原因の絶対的必然性 (absolute Nothwendigkeit) にまでいたり、自由にかんする理性の実践的使用は、同じく絶対的必然性にいたるが、しかしそれはたんに、理性的存在者そのものの行為の [道德] 法則の絶対的必然性である。ところで、われわれのすべての理性使用の本質的原理は、理性認識をしてその認識が必然的であるという意識 (Bewußtsein ihrer Nothwendigkeit) にまで駆り立てることである (なぜなら、この必然性を欠けば、それは理性認識でないことになろうから)。[②必然性と条件] しかしまた、同様に本質的な制限 (wesentliche Einschränkung) が同じ理性にそなわるのであって、その制限とは、現存するものであれ、生起するものであれ、あるいはさらに生起すべきものであれ、それらの必然性を理性が洞察できるのは、現存したり生起したり生起すべきものがまさにそうなる条件 (Bedingung) が根底に置かれている場合に限られる、という制限である。しかしこうして、条件を絶えず問い求める [～はいかにして可能であるかの可能性の根拠への分析的な無限遡行] ことによって、理性の満足はつねに先へ先へと引き延ばされる。それゆえ理性は、無条件的に=必然的なもの (das Unbedingt=Nothwendige) を休みなしに求め、それを十分に把握するなんらかの手段をもたず、これを想定する、という必要に迫られる (genöthigt, es [das Unbedingt=Nothwendige] anzunehmen, ohne irgend ein Mittel, es [das Unbedingt=Nothwendige] sich begreiflich zu machen) のであって、もし理性が、この前提 (無条件的に=必然的なもの) と両立できる概念 [自然の概念であれ、自由の概念であれ] を発見できさえすれば、それで [理性は] 十分幸いなのである。[③定言命法と絶対的必然性] それゆえ、道德性の最上の原理についてのわれわれの

演繹〔証明〕が、無条件的な実践的〔道徳的〕法則（定言命法はこのような法則でなければならないが）をその絶対的必然性にかんして十分に把握させることができないのは、この演繹の咎ではなく、人間の理性一般が受けなければならない非難なのである。なぜなら、われわれの演繹がこのこと〔無条件的な実践的法則をその絶対的必然性にかんして十分に把握させること〕をある条件（Bedingung）を介して、つまり根底にあるなんらかの関心（Interesse）を介して、行おうとしないことは、演繹に対する嫌疑となることはないからで、それと言うのも、それを行えば〔演繹を、ある条件、なんらかの関心を介して行えば〕それ〔道徳性の最上の原理〕はなんら道徳法則、すなわち自由の最上の法則ではないことになろう〔条件や関心のほうが道徳法則の根底にあるものとなる〕。こうしてわれわれは、なるほど道徳的命法の実践的無条件的な必然性を把握しないが、しかしそれが把握できないことを把握する（wir begreifen aber doch seine Unbegreiflichkeit）のであって、これがもろもろの原理にかんして人間理性の限界（die Grenze der menschlichen Vernunft）にまでいたろうと努力する哲学（eine Philosophie）に対して、われわれが正当な理由をもって要求できるすべてなのである。（Der speculative Gebrauch der Vernunft in Ansehung der Natur führt auf absolute Nothwendigkeit irgend einer obersten Ursache der Welt ; der praktische Gebrauch der Vernunft in Absicht auf die Freiheit führt auch auf absolute Nothwendigkeit, aber nur der Gesetze der Handlungen eines vernünftigen Wesens als eines solchen. Nun ist es ein wesentliches Princip alles Gebrauchs unserer Vernunft, ihr Erkenntnis bis zum Bewußtsein ihrer Nothwendigkeit zu treiben（denn ohne diese wäre sie nicht Erkenntnis der Vernunft）. Es ist aber auch eine eben so wesentliche Einschränkung eben derselben Vernunft, daß sie weder die Nothwendigkeit dessen, was da ist, oder was geschieht, noch dessen, was geschehen soll, einsehen kann, wenn nicht eine Bedingung, unter der es da ist oder geschieht oder geschehen soll, zum Grunde gelegt wird. Auf diese Weise aber wird durch die beständige Nachfrage nach der Bedingung die Befriedigung der Vernunft nur immer weiter aufgeschoben. Daher sucht sie rastlos das Unbedingt=Nothwendige und sieht sich genöthigt, es anzunehmen, ohne irgend ein Mittel, es sich begreiflich zu machen ; glücklich genug, wenn sie nur den Begriff ausfindig machen kann, der sich mit dieser Voraussetzung verträgt. Es ist also kein Tadel für unsere Deduction des obersten Princip der Moralität, sondern ein Vorwurf, den man der menschlichen Vernunft überhaupt machen müßte, daß sie ein unbedingtes praktisches Gesetz（dergleichen der kategorische Imperativ sein muß）seiner absoluten Nothwendigkeit noch nicht begreiflich machen kann ; denn daß sie dieses nicht durch eine Bedingung, nämlich vermittelt irgend eines zum Grunde gelegten Interesse, thun will, kann ihr nicht verdacht werden, weil es alsdann kein moralisches, d. i. oberstes Gesetz der Freiheit sein würde. Und so begreifen wir zwar nicht die praktische unbedingte Nothwendigkeit des moralischen Imperativs, wir begreifen aber doch seine Unbegreiflichkeit, welches alles ist, was billigermaßen von einer Philosophie, die bis zur Grenze der menschlichen Vernunft in Principien strebt, gefordert werden kann.）」（同上、221～222頁）

（追記）

以上は、カントの『道徳形而上学の基礎づけ』の研究と言うよりも、宇都宮芳明氏の『訳注・カント『道徳形而上学の基礎づけ』』（作品70）の研究である。後者は、だいたい一段落ごとの「訳」と「注解」からなっている。私は、この「注解」を導きの糸として、テキストの「読解」を試みた。よくは分からないところが多々あったが、捨て石のつもりで、私の理解を明確にする

べく努力した。「実践哲学ノート」は「宇都宮芳明氏の実践哲学」の研究であるから、ここでカントの『道徳形而上学の基礎づけ』の読解を試みたのも、宇都宮氏の実践哲学を理解するためには、カントの実践哲学の理解が必須なためである。そういういわば「主従関係」を誤解なさらぬよう、お願いしたい。カントの読解はまだまだ続くが、それは確かに分量は多いけれども、「実践哲学ノート」の「本文」に付された「注」でしかないのである。なお、基本方針は抜粋であるが、必要なあいには全文引用を行なった。とくに後半は、ほとんど全文引用となった。それだけ内容が難しく微妙であったためである。もしひとが、この「読解」を、「宇都宮氏の訳プラスカントの原文」にすぎないと見なすならば、それはただおのれの無知を告げているだけのことである。そういう無知なひとには、私の「読解」は無意味なものであろう。およそ「哲学を読む」という作業と雖も、独自の労苦を伴う知的営為なのである。独語のできるひとは、ぜひ原文をも読んでほしい。やはり原文で読むのが、一番なのである。そのためにも、原文を添えておいたのである。カントの読解は、これから、まだまだ続く。おおらかに、ゆっくりと、読み進もう、と思っている。「実践哲学ノート」は、今後ますます、複雑な構成・様相を呈するであろう。もう一度言えば、その本筋（主題）は、「宇都宮芳明氏の・人間らしさの実践哲学」の「生成と構造」の解明にあるのである。

（『道徳形而上学の基礎づけ』「読解」完）